

14 海老蒔絵印籠 小原春翠 一点

明治期(二十世紀)  
漆塗、蒔絵 一〇・三×七・三×二・五

正月飾りにも用いられる伊勢海老は、正月飾りそのものを描いた懸蓬莱の絵や、染織文様のなかに吉祥の主題として取りあげられてきた。この三段の大振りな印籠は、一匹の伊勢海老を片面に大きく描いた作品。黒漆地に金平目粉を密に置いて地とし、海老の部分は高蒔絵の手法で下地を薄く盛り上げて赤茶系の色漆を塗り、海老の殻の質感まで細密に表現している。根付は象牙で蛸や巻き貝、魚籠を彫り表したものだ。紐の締め具合を調節する緒縮は堆朱で、波を彫刻し、小さな真珠を各所に嵌めて飛沫を表している。

印籠の底裏に「巖松齋春翠 花押」の蒔絵銘があり、明治期から昭和初期にかけての蒔絵師で、帝室技芸員・川之邊一朝の門人であったと考えられる小原春翠の作である。本作は明治期に宮内省が調度品として購入したもので、明治四十四年の時点では宮内省にあったことが記録から確認できる。



15 聖寿偕老之図 吉田百穂 一幅

大正十四年(一九二五)  
絹本着色 本紙一七五・〇×五六・〇

本図は、大正十四年の大正天皇大婚二十五年を祝って、千代田通信社より献上されたものである。「聖寿」とは天子の御年、「偕老」とは夫婦共に老いるという意味であり、両陛下揃ってのご長寿を願って制作されたものであることがわかる。二尾の海老が旭日の差す中、気持ちよさそうに波に揺られている。海老は、その姿から年老いて腰が曲がるまで長生きをするという意味を持つ長寿の象徴であり、ご慶事の画題にふさわしいものである。

海老をモチーフとした絵画作品としては、江戸時代中期の長澤蘆雪や伊藤若冲の「海老図」があるほか、正月の注連飾の図や江戸時代後半から登場する様々な魚を海中に配した群魚図、また近世以降に描かれた涅槃図の中などに海老の姿が認められる。また、芸能装束や工芸の意匠にも近世以降は盛んに用いられ、慶事の折に最も重視され飾られるモチーフとなった。画家の吉田百穂については現在のところ詳細が不明である。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

福やぶござれ ― 寿ぎの美・新春に集う

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 42

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十九年一月六日発行

©2007, The Museum of the Imperial Collections